

## <井上圭子さんの生涯>

グラフィックアートを志して仕事を始めたのも束の間、病によって社会との関わりが閉ざされました。再び社会の扉を開けるきっかけは母が勧めてくれたクラフトでした。さらに独学で絵画や刺繍などを創作し続けました。

病弱で、社会との関わりを閉ざして過ごした半生を乗り越え、アートによって生きる力を取り戻し、友人との関係が開かれていった人生。アートと共に、自身の心のままに豊かに生きた井上圭子さんの人生の軌跡は、膨大な量の作品が物語っています。

(表紙は、井上圭子さん自身による自画像)



心躍るような軽快で美しい色彩を好んで使った

## <井上圭子メモリアル基金の設立>

圭子さんの生涯を長く記憶にとどめたいという弟、井上良一さん、里美さん夫妻の思いが、アートの力で人生を豊かにする活動を支援する「井上圭子メモリアル基金」に結実し、良一さんからの委託を受けパブリックリソース財団内に2014年12月に設立されました。

## <基金の成果>

「井上圭子メモリアル基金」は、パブリックリソース財団の「アート&ヘルス基金」を通じて、認定特定非営利活動法人ファミリーハウスが運営する「うさぎさんのおうち」(療養する子どもたちに付き添う家族向けの宿泊施設)に2015年3月に設置された「エイブルアート」(障がい者の手による絵画)の展示プロジェクトに活かされました。

公益財団法人  
パブリックリソース財団



〒104-0043 東京都中央区湊 2-16-25 ライオンズマンション鉄砲洲第3 202号  
Phone 03-5540-6256 Fax 03-5540-1030  
URL <http://www.public.or.jp>  
<http://www.giveone.net> (オンライン寄付サイト Give One/ ギブワン)

# KEIKO INOUE Memorial Fund

井上圭子  
メモリアル基金



KEIKO INOUE  
June 25, 1936 — April 1, 2011

## アートへの目覚めと苦難

井上圭子さんは、1936年6月25日に井上欽哉さん、こたかさん夫婦の次女として静岡県沼津市に生まれました。その後、欽哉さんの仕事のため福島、長野などに転居した後、一家は井上家の本拠地である福井県に戻って終戦を迎えます。混乱の中にも生きる希望が漲る時勢となり、才気溢れ闊達な少女は中学校で美術に出会い、絵画、洋装など、美しく創作的な活動に関心を膨らませていきました。

中学2年生の時に一家は神奈川県平塚市に転居し、高校を卒業した圭子さんは杉野学園女子短期大学でドレスメーカーを学びました。デザインへの夢を持ち続けた彼女は、グラフィックアーティストの登竜門、桑沢デザイン研究所に入所、基礎クラスに引き続き研究科に進み研鑽を重ねていきました。

研究科修了と同時に圭子さんは、専門誌「グラフィックデザイン」の編集部で就職。1959年11月の創刊号の立ち上げから編集に携わり、当時の日本デザイン界を牽引する勝野勝編集長や原弘氏などの薫陶を直接に受け、刺激に満ちた社会人生活をスタートさせます。

ところが希望叶った就職であったはずが、厳しく時間に



日本各地に出かけては、自然豊かな風景を油絵に描いた

追われる仕事の中で神経をすり減らした圭子さんは、個人的な悩みが高じた事も重なって間もなく体調を崩し、仕事を続けることが難しくなります。入退院を繰り返す中、一度は職場復帰をしたものの、結局は失意のうちに職場を離れることになりました。20代から40代にかけての圭子さんは、学生時代から好きだった油絵を時々描く以外は、家族以外の人と会うこともなく、ほとんどの時間を自宅や病院で過ごす毎日でした。

30代半ばを過ぎた圭子さんに、少しでも励みになればと母こたかさんは革クラフトを勧めます。もともと創作することが大好きな圭子さんは、作品を友人にあげたり、人から頼まれて作品を作るようになりました。体調不良は続いていたものの、父母が高齢化に伴い健康に支障をきたすようになると、必要に迫られて家事も受け持つようになり、それと並行するように、徐々に作品作りに集中することが出来るようになっていきました。1984年、妹茂子さんが亡くなり、1986年、父欽哉さんが亡くなって、これを契機に弟良一さん一家が杉並の本家に同居するようになり、圭子さんのその後の人生に変化をもたらすことになりました。

## ほとばしる創作活動への情熱

母こたかさんと圭子さんの二人に、弟の良一さん、妻の里美さんと二人のお嬢さんが加わり二世帯同居が始まりました。圭子さんが51歳の時でした。書道が続けていた里美さんの創作活動に触発されてか、圭子さんは一度は封じ込めていたアートへの思いを解き放ち始めました。油絵、日本画、刺繍、表装など、描きたい、作りたいと思えば直ぐに行動に移し制作に没頭して、次々に作品を仕上げていきました。

そうした創作活動とともに体力を取り戻した彼女は生まれ故郷の沼津をはじめ、東北、北陸、四国など各地を訪れては美しい風景を写真に収め、自宅で油絵に仕上げ



細かい針仕事にも圭子さんの獨創性が光る刺繍作品

ていきました。習うより自分で考えて作り出すことが好きな彼女は、風景、静物、人物、植物など、身の回りの美しい対象を捉えて、独自のアート観あふれる作品を生み出していきました。病で辛い日々を過ごしてきたはずなのに、絵画は、どれも明るい基調で貫かれています。

里美さんは圭子さんのアートに忌憚のない感想を述べ、彼女はそれを笑顔で受け止め、二人は同じ屋根の下で切磋琢磨していったのです。

1988年に始まった「上野の森美術館・日本の自然を描く展」に、圭子さんは毎年のように出展しては多くの入選を受け、亡くなる1年前の2010年まで精力的に出展を続けました。

晩年肺を患いながらもアートへの思いを最期まで心に燃やし続けた圭子さんは多作で、400点以上の絵画、一生掛かっても着尽くせないほどの自作の洋服、数々の表装、刺繍、革細工の作品を残し、2011年4月1日に74歳の生涯を閉じました。一つ一つの作品を自分の分身のように慈しみ、手元に置いておくことを好んだ彼女。今その作品は多くの友人、家族の元に贈られ、圭子さんの思い出のよすがとなっています。

病のため社会と隔絶された辛い時期をくぐり抜け、家族の愛情に包まれてアートへの思いを存分に実らせた後半生を過ごしました。芸術の力が人の心と体を支え、強めてくれることを体現した豊かな生涯でした。